

「もとはこちら」のお話し

No.68 今月のテーマ

ツバメの子育て



心からのお詫びには
反省が伴い
修正が起きてくる筈である

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

今年もまたツバメの夫婦がやってきました。
そして我が家の軒下の巣に、卵を産み落としました。

夫婦は入れ替わり立ち代り、卵を抱いて温め、雛がかえ孵つてからは、夜明けから日が暮れるまで、何度も何度も餌を運び続けました。途中で巣が壊れた時は、修復のために藁や枯れ草を運んできて、あつという間に修繕し、とにかくけなげによく働いておりました。

黄色いくちばしを思いっきり開けて鳴く雛たちと、持ち帰った餌を口移しに与える親鳥の姿は本当に可愛らしく、何度見ても決して飽きる事ありませんでした。雛たちは、日ごとにどんどん成長し、くちばしの横の色が黄色から白に変わるころ、親鳥が餌を運んでくる回数が目に見えて減っていきました。

その後しばらくして、玄関先に敷いたダンボールの紙の上に、雛の落とす糞に混じって、小さなトンボなどの死骸が転がっている事に気が付きました。それも一度や二度ではありません。推測するところ、どうも親ツバメは、採ってきたそれらの餌を雛たちには与えず、雛の目の前でわざと落としているようです。そういう心なしかひな達が、餌を持って帰って来た親を見つけて鳴く時の、歓喜のジジジジという声がいつもと違って、何かとても切なそうに聞こえます。

ツバメの苦難と巣立ち

またある日のこと、おびただしい数のツバメの鳴き声が、けたたましく入り乱れて聞こえ、何ごとかと飛び出してみたところ、どこから来たのか大勢のツバメ軍団が巣の周りを飛び交っており、我が家のツバメ達との大乱闘が繰り広げられておりました。後で分かったのですが、結局、我が家の雛の一羽が、誘拐されてしまったようでした。小さな羽根が一枚近くに落ちていて、雛の数が一羽減ってしまっていたのです。

その誘拐事件の少し前には、毛もまだ生えきらないまま死んでしまった雛が巣から落とされ、その次には、育ちの悪い別の雛が生きたまま巣から落とされ、色々工夫したのですが、その子も結局、育つ事ができませんでした。小さなツバメのお墓が二つ、庭先に並んでいます。



色々あって、結局無事に育つたのは二羽だけです。

雛の誘拐事件があつたその数日後、一羽の雛が巣のヘリにつかまって、バタバタと羽を何度もばたつかせている姿が見えました。近くの屋根の上には親ツバメが迎えに来ており、さあ、ここまで飛んでおいで、というようにツイーツイーとしきりに鳴いておりました。いよいよ巣立ちの時かと思つてしばらくの後、サーッと影が動いて、雛は飛び立っていきました。

最後に残つた雛は、どうしても飛び立つ決心が付かないようで、見上げればいつもそこに、小さな頭がひとつ見えていました。しかしその翌日、その雛も巣のヘリの外側につかまって立ち、バタバタと羽を動かし、いよいよ飛び立つような仕草を始めました。

やはり親ツバメ達が近くに来て、ツイー、ツイーと呼んでいます。

その後しばらくしてから巣を仰ぎ見ると、いつの間に飛び立ったのかそこに雛の姿はなく、無事に巣立つた事が分かりました。ところがその日は次第に天気が悪くなり、嵐のような夜になりました。

やっこの思いで巣立つた夜に、あの雛たちは一体どこで過ごしているのだらうと案じておりましたが、明けて翌日、玄関先に出てみると、なんと巣立つた筈のあの最後のツバメが戻って来ています。

どうも頑張つて巣立つてはみたものの、あまりの怖さに、元の巣に戻ってきてしまったようです。しばらくしてまた親ツバメや兄弟ツバメ達はその子を迎えにやって来ました。困った子ね、ちゃんと巣立ちなさい、と叱っているようでした。

一斉の飛び立ち

最近我が家の周りには、何十羽というツバメがやって来て電線などにとまり、夫々にグチャグチャジーとお喋り等をして、とても賑やかです。

大きいツバメは多分お父さんとお母さん、そして一回り小さいツバメは多分今年生まれた子供ツバメ達なのでしょう。子供の方は単に体が小さいだけでなく、その飛び方も、いかにも幼稚な感じですが、ツイーツと飛ぶというのでなく、バタバタ、バタバタという感じです。

飛び方の練習中なのでしょうが、一旦巣立つた雛はもう親から餌を貰うという事もないでしょうから、多分、昆虫などの餌の採り方も勉強中なのでしょう。

聞く所によると、これらのツバメは、紀ノ川のある地点に集まつて大集団となり、一斉に南の島に向けて飛んでいくとの事です。その数なんと数千羽という事です。毎年八月の第一日曜日には、その飛び立つ様子が見られるという事で、飛び立つツバメ達を観察するための会が開かれるとの事です。

多分、ウチのツバメ一家もその数千羽という一群に混じつて、一斉に南の空に飛んでいくのでしょう。その長旅に備え、ひな鳥達は今、必死の訓練に明け暮れているのでしょう。あの小さな体でもつて、よくもそんな遠いところまで飛んで行くものだと思いますが、このツバメ達は一体どんな旅をするのでしょうか。

ところでツバメというのは毎年同じ巣に戻ってくるとよく聞きますが、しかし南の島で冬を過ごし、また日本に、そして我が家の巣に無事に戻つて来れるのは、せいぜい一割程度しかないそうです。

ツバメの子育ての姿は、日本各地で見られる事と思います。しかし昨今は私どものところでも農薬のせいか昆虫類が減つぽう少なくなっており、ツバメの子育ても楽ではないようです。以前は生んだ卵は殆ど全てが無事に孵り、また巣立ちもちゃんと揃つて出来てい

たように思うのですが、めつきり少なくなった虫を必死で探して雛の元に運び、そして頃合いを見計らって雛への餌やりを止め、巣立ちを促す親鳥の苦労が思われます。

一方、ツバメが巣を造るところは人間の目の届く玄関先などが多いようです。それも雨風を防ぐことの出来る奥まった軒先の中などです。

子育てに安全な家としてツバメに選ばれた家の人達は、殆どの人がツバメを歓迎し、その子育てを温かく見守っているようです。

かく言う私のところでも、雛が狙われる事のないようにと蛇の忌避剤を買ってきて巣の周辺にまいたり、カラスが近くでガーガーと鳴き出すと、飛び出して追いついて追いつたりと、何かとツバメを気使う日々でした。そんなに気をつけていても、同じツバメの襲撃でやられることもある訳で、雛が無事に巣立つまでは、楽しさと心配りの落ち着かない日々を過ごすわけです。

今は、無事に皆が南の島に飛んで行けますように、そして又どうぞ無事にここに帰ってきて、また子育てをしてくれますようにと祈る日々です。

ツバメの子育て、そして巣立ちの様子などを見ていて、なぜか平井先生が書かれた文章を思い出しました。

先生はご自分で書かれたその文章を声を出して読まれるたびに、途中からいつも涙声になりました。親に心配をかけた申し訳なさ、その親への有難さに涙されたのでしょうか。

今月はお盆月という事もあり、平井先生の声が聞こえてくるようなその『お母さん、ありがとう』という短い文章を、改めてご紹介させて頂きたいと思います。

毎年やってくるお盆というのは、例えば私達があのツバメに対し、陰ながらその安全や成長を見守り続け、巣立てば巣立ったでまた、そのツバメ達が遠く離れた南の島への長旅を終え、元気にもとの巣

に戻ってくる事を祈り続けているように、今は人間としての厳しい修行の旅の途中にあり、日々苦勞をしている私達のことを、いつも陰から温かく見守り続け、励まし続けてくださっているご先祖様や、お世話になった多くの方々、そして命のもとである大親様に対して、日頃のご恩に対して改めて、心からの感謝を伝える為の一つの行事なのかもしれません。

たとえこちらからは影も形も見えなくても、親や神仏はいつも私達とともにあり、常に私達のことを気遣い見守り続けてくださっているのです。

~~~~~

お母さん、ありがとう

平井謙次

思い起こせば、このお世話になった五十八年間。本当に、本当に、親不孝ばかりの五十八年間。

幼少時はワンパクながらもまあまあ順調に育てていただき、それにお心えしての十三年間。

以来、心臓病になってからは、いま、子の親となって初めて知るお母さんの心中。

二十一歳の時、第一回目の手術の日。

手術中自宅にこもり、仏壇の前に私の無事をお祈りいただき、兄が手術の成功を報告するため電話をしても出ないとのこと。どうしたのかと近所に連絡し見に行ってもなかったところ、

「家の電話は鳴るには鳴ったが、けんじの手術の結果の連絡だと感じたので、恐ろしくて受話器を取れなかった」とのこと。

その手術後も私への心配のあまり、目の周りが真っ黒になったり、また私の延命のためなら自分の身を削ってでもと、命がけで神仏にお祈りしてくださったお母さん。

また結婚して間もなく心臓病が再発。



お母さんに内緒で断食道場の門をたたくも、やせ衰えていくわが夫を心配するあまり、妻がお母さんに連絡した折も、神職である自分の仕事を放り出し、即座にかけつけてくださったお母さん。そして本当に手厚い看病をしていただきました。

枕を並べて寝ていたお母さんに心配かけまいと、夜中にそつと便所に向かったのに、出てきてみれば戸の外にたたずみ、息子の安否を気づかうお母さんの姿がありました。

また私が、あと八日という断食予定を途中挫折したときも、私に代わって八日の断食をしてくださり、その身を捧げてくださいました。このときほど深い親の慈愛を感じたことはありません。

こんな私があるとき内観してみました。

幼少の頃からお母さんに迷惑ばかりかけたこと。そしてうそを言ったこと。

お世話になった幾多のあれこれ。

それらの一つひとつは、ここでは筆にしません、本当に膨大なものでした。

それにつけても、これほどお世話になりながら、迷惑ばかり掛けているきたこの私。

いままでいったいお母さんに何かお返しをさせていたただいたろうかと、一週間、朝から晩まで調べたのです。

お恥ずかしいかぎりですが、お母さんにお返ししたことは何一つない。

皆無です。

それどころか、今をもっても折に触れ、ご心配をお掛けし続けて

いる私です。

こんなごうたれ息子のために、八十余年の母、いまなお私の事をるとして心配し、心を痛めてくださっているお母さん。

母こそが私にとっての大神人。

私の母は菩薩にもまさる母。

こんな素晴らしい母を持つて私は幸せです。

「お母ちゃん」幼少のころはこう呼んだ。

「お母ちゃん、本当にありがとう。この五十八年間・・・けんじ」



## 〔1〕案内

八月の勉強会は、誠に勝手ながら、

都合によりお休みにさせていただきます。

尚、次回は、九月八日（土）を予定しています。

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail:

[data3@motoha-kochira.com](mailto:data3@motoha-kochira.com)

073・461・6300